英語学習の呪縛から逃れる道はどこにあるのか？（２）－英語修得のための課題とその解決－

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大友, 信秀, OTOMO, Nobuhide メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00058162

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

英語学習の呪縛から逃れる道はどこにあるのか？(2)

－英語修得のための課題とその解決－

Is there any way to rescue Japanese people trapped under the spell of learning English?(2)

大　友　信　秀

3．言葉を習得するということ

(1) 単語を置き換えればいいというわけではない。

英語教育のあるべき姿を明らかにするためにも、英語を含む言語の習得について必要な要素を把握しておく必要がある。

言語は、名詞や動詞などの単語で構成されているが、名詞や動詞はある程度同じ意味に置き換えることができても、助詞等を含むすべての単語を単純に置き換えて一つの言語から他の言語に翻訳ができないことは改めて言うまでもない。

このことは、そもそも異なる言語ごとに名詞や動詞にどのような範囲の意味を与えるのかが異なっていたり[1]、日本語は語順に関して鷹揚であるのに対して、英語は語順に厳格であるため[2]、日本語をそのままの語順で単語だけ置き換えても英語として同じ意味になるとは限らないことなどが理由になっている。

1　たとえば、日本語では兄弟に年上と年下の区別があるが、英語で兄弟を意味する brother はそのまま使用する場合には、兄にも弟にも使用できるため、年上と年下の区別がなく、単語として完全に対応するわけではない。また、動詞の例でいうと、家に窓が二つあるという表現を英語で言えば、The house has two windows. となり、has/have という日本語で「持つ」という意味にあたる単語が使用され、そのままでは日本語に置き換えることはできない。このような非対称性について、李春喜「英語的な表現と日本語的な表現」外国語学部紀要 10 号 99-105 頁（2014）参照。

2　英語が語順に厳格になった歴史的経緯については、堀田隆一「現代英語を英語史の視点から考える－ 11 回なぜ英語は SVO の語順なのか？（前編）、12 回（後編）」at http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/history_of_english/series/s11.html, http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/history_of_english/series/s12.html（2019.12.1 閲覧）参照。

(2) 情報を他者に伝えることができるという意味

①言語でなくても情報は伝達できる

言語は、情報を他者に伝えるために使用されるが、そもそも情報は言語によらずとも伝達することができる。たとえば、信号は赤色、青色（実際には緑色）、黄色のライトを使用して自動車が停止すべきかそうでないかの情報を伝えている。また、ピクトグラム（pictogram）[3] は、障害者を表す国際シンボルマーク [4] や国内で使用されている非常口を知らせるマーク [5] で知られているが、日本では 1964 年の東京オリンピック開催時に外国語によるコミュニケーションが難しいと思われた当時の状況に合わせて勝美勝らによって開発されたのが始まりである [6]。これらは、言語によらずマークによりそれが示す対象の意味を伝える技術であり、言語によらない情報伝達ツールとして現在でも世界的に利用されている [7]。この他にも、俳優は表情や演技で感情という情報を伝えることができ、また、そのような演技については一定程度学習によって習得できる。

②言語で情報を伝えるということ

言語で情報を伝えるのは、ピクトグラムのようなマークだけでは十分に伝えられない複雑な情報を伝えることが可能になるからである。そして、そのような複雑な情報については、上記のように、単語だけでは伝えたい内容を伝える

3　ピクトグラフ (pictograph) ともいう。

4

5

6　国民生活センター「ヨーロッパで生まれ日本で発展ピクトグラム」マークあれこれ 19 号 16-17 頁（2014）参照。

7　瞬間的に情報を伝える道具として、ピクトグラムのアイデアを応用したインフォグラフィック（infographics）が活用されている。たとえば、櫻田潤『たのしいインフォグラフィック入門』（BNN、2013）参照。

ことができない。それでは、情報を他者に伝えることができるようになるには、言語に関してどのようなことを最低限習得することが必要なのであろうか。

最も簡単な方法は、言語圏で一定期間過ごしながら、状況ごとに使用するフレーズを覚えていくことが考えられる。朝起きれば「おはようございます。」と言う。食事をする前には「いただきます。」と言う。ということを文法や本来の意味について理解しなくとも、使用することで記憶してしまえばコミュニケーションは可能になる。多読や多聴という方法は、このような理屈を応用した言語習得方法である。

このような方法で言語を習得することもできるが、すでに一つ以上の言語を習得して使用している場合は、その言語との関係で習得しようとしている言語の特徴を理解すれば、より容易に、より正確に理解することができる。言語の特徴を理解し、これに必要な情報を乗せて他者に伝えることで初めて情報が他者に正確に伝わるようになる。

4. 必要な英語能力とは何か？

(1) 適切に情報を受信できる力

①聴くことについて[8]

1) 発音を聴き取ることができること

聴覚により情報を取得するためには、それが言語であれ言語以外のものであれ聴き取れることが不可欠になる。英語の聴き取りに関しては、日本語との周波数の違いが、日本人にとって英語を聞き取ることに対する障害になっていると言われてきた[9]。しかしながら、周波数の違いはあるがどちらも人間の聴力で

8　聴き取り（言語の listening）は多様な処理を必要とするが（この点に関する研究として、たとえば、大木俊英・前田啓貴・岡秀亮「何が英語のリスニングを困難にするのか？」白鴎大学教育学部論集 10 巻 2 号 511-530（2016）参照。）、本稿ではそのうち意識すべき重要度の高いものに絞って論じる。

9　英語教材販売会社のサイトで日本語と英語の周波数の違いが聴き取りに影響している

聞き取れる範囲の周波数で発音されていることから、周波数の違いそのものが原因であるとは考えられない[10]。

自分が知らない（もしくはあまり得意でない）外国語が話されている時に、早口に聞こえたり、何を言っているかわからないのは、単純に、そのような言語を脳が言語として認識できていないことに由来し、このことは、脳を認識できるように訓練することで解決可能である（訓練としては、脳が認識するまで繰り返しその単語やフレーズを聴くということが効果的である。特に、英語と日本語には、話す能力（発音能力）とも直結するリズムの大きな違いがあるため[11]、そのような違いに慣れることが必要である。）。

2) 単語の意味がわかること

発音を聴き取ることができることに含まれるが、聴いている音が単語を指す場合には、その意味がわかることが必要になる。このためには、自分が必要とするレベルの会話を成立させるのに十分な数の単語を理解することが求められる。英語の場合、頻出単語 2800 で、話し言葉と書き言葉の 92% をカバーできると言われている[12]。

3) 文章（フレーズ）の意味がわかること

さらに、単語の意味がわかっているだけでは、単語によって構成される文章の意味がわかるわけではないので、文章単位で意味を理解できるようになるこ

とされてきたことを指摘するものとして、たとえば、https://www. 英語教材比較ランキング .com/benkyohou/shuhasu.html（2019.12.1 閲覧）参照。

10　ただし、聴き取りとは異なり自身が発声する段階では、当然、当該周波数の発生が必要とされる。英会話上級者と周波数の関係についての研究として、たとえば、本沢彩「英語スピーキングの流暢さと基本周波数：上位群と中間群の比較（English Speaking Fluency and Fundamental Frequency : A Comparison of Advanced and Intermediate Groups）」関東学院大学文学部紀要 131 号 103-120 頁（2014）参照。

11　話す能力との関係で後述。

12　http://www.newgeneralservicelist.org/（2019.12.1 閲覧）参照。

とも必要になる。この場合も、自身が必要とする状況（たとえば、日常会話であったり、取引先とのビジネス会話であったり、学校での授業で必要とされる会話であったりする）で使用される頻出表現を理解しておくことが有益である。

②読むことについて

1) 文字が読めること

日本語は、表音文字であるひらがな、カタカナに加え表意文字である漢字[13]があるのに対して、英語は表音文字であるアルファベットのみである。ただし、日本語のひらがなは、それぞれ一文字が一つの発音を担当し、例外がないのに対して、英語の場合、一つの発音を二つ以上の文字が担当し、また、その組み合わせによっては、同じ文字を使用していても発音が異なる場合がある。このような文字の役割を理解することが言語を視覚によって利用する場合には必要になる。

2) その言語の最低限の文法が理解できていること

単語の意味を理解することができれば、文章に含まれる単語群から、おおよその内容を推測することができる場合が多い。そのため、その言語の理解に必要な最低限の文法を知っていれば自身の推測能力を活用して言語情報である文章を理解することもある程度可能になる（その意味では、外国語能力には、単純にある者が外国語を理解している度合いだけでなく、その者がもともと有している推理能力等が影響する。）。

13　日本で実際に使用されている漢字は何万字にも及ぶが、現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安として内閣告示で示されている常用漢字（平成 22 年内閣告示第 2 号）は、2136 文字である。

(2) 適切に情報を発信できる力（受信能力に加え）

①話す場合

1) 瞬時に表現できる力

i) 基本的論理力

話すという行為による情報発信の場合、相手とのコミュニケーションをスムーズにするためには、相手からの情報発信にできるだけ瞬時に反応することが求められる。このことは言語で瞬時に表現できる力を意味するが、それには、言語を使用する前提となる、相手の真意を理解して、直接的に返答するか、間接的に返答するか、または返答しないか、というような判断を行う単純な外国語運用能力とは別の理解力も必要となる。

ii) 動詞を変形させる方法 [14]

英語の場合、文章は動詞を中心に名詞の状態や性質を表したり（自動詞や不完全自動詞）、名詞と名詞の関係を表したり（他動詞）する。このため、動詞が極めて重要な役割を担っていることに加え、一つの文章に本動詞は一つしか使用できないことから、二つ以上の動詞を使用した表現を組み合わせる場合には、本動詞を除く動詞を分詞等の形に変形させなければならない。このために、動詞を変形させる方法をあらかじめ理解しておかなければ会話のスピードに合わせて柔軟に自分が伝えたい情報を言語化（英語で表現）することができなくなる。そして、このためには、動詞に関する時制の理解が極めて重要になる。

iii) 頻出表現の暗記（潜在意識への定着）

瞬間的に反応するために、頻出表現を暗記して、ある程度頻繁に使用される表現には機械的に脳が反応するような訓練をしておくことは効果的である。このために、自身が言語を使用する状況に合わせた頻出表現を知り、暗記してお

14　大友信秀「大学はまだ必要とされているか。」金沢法学 58 巻 1 号 87 頁（2015）参照。

くことが会話力向上のためには重要である。

iv) 発音方法の習得

聴き取る能力とも密接に関連するが、英語と日本語とでは、発声の際のリズムが大きく異なるとされている。世界の言語には 3 つのリズムのタイプがあると言われている [15]。一つは英語が属する強勢拍リズム（stress-timed rhythm）と言われるものであり、ドイツ語やオランダ語などもこれに属す。もう一つは音節拍リズム（syllable-timed rhythm）と呼ばれるものでありスペイン語、フランス語、イタリア語などのラテン語系言語が属すとされる。そして、最後がモーラ拍リズム（mora-timed rhythm）と呼ばれるものであり、これに属するのは（現在実用的に使用されている言語としては）日本語だけとされている。

日本語は多くの英語由来の外来語を有しており、英語の語彙数を増加させるには、これを利用しない手はないとも考えられるが、外来語の多くは、強勢拍である英語の単語を主にスペリングからモーラ拍に置き換えているため、英語を話すという段階ではかえってこれを妨げる要因にもなることに注意すべきである [16] のは、このような言語としてのリズムの大きな違いに由来する。

たとえば、日本語となったカメラという機械の名称は英語の camera に由来するが、日本語でカメラと発音する際には、か・め・らというように 3 つの音に分けたリズムで発音する。これに対して、英語で camera を発音する際は、ca（キャ）の部分を強く（強勢を置き）キャメラという音を一つのまとまりで発声する。また、英語で 2 語以上で構成されている発音についても、例えば、on it という発音は o の部分に強勢を置き、オ / アニッ（トゥ）というように一

15　Marie Kjeldgaard「Prosodic Features of Japanese and English」言語と文化 34 号 165-173 頁（2016、愛知大学）、Hirst, D. & Di Cristo, A. “A survey of intonation systems.” , D. Hirst & A. Di Cristo (Eds.), *Intonation systems: A survey of twenty languages*（Cambridge, MA: Cambridge University Press,1998）360–375 参照。

16　英語学習の際の外来語の活用とその注意点については、福田稔「小学校英語教育におけるカタカナ英語について（Katakana Loan Words in Elementary School English Education）」宮崎公立大学人文学部紀要 26 巻 1 号 249-260（2019）参照。

つのまとまった発音になる（ここに見られるように子音で終わる単語に次ぎに来る単語の母音が重なって発音が一つになる現象をリエゾンという。このように、リエゾンも強勢リズムから生じる現象であることがわかる。）。これを日本語で単純に置き換えればオ・ン・イ・ッ・トと 5 つに分かれたリズムで発声することになる。日本人は、日本語をアルファベットで表示するローマ字というものを勉強しているため、英語のアルファベットを見たときにもローマ字と同様に発音を捉えがちであるが、英語におけるアルファベットと実際の発音の対応はローマ字と日本語の発音の対応とは全く異なることに注意が必要である。このことから、日本語を母語とする者が英語の発音を正確に行おうとする場合には、文章あるいは単語の並びにおける強勢の位置を理解し、強勢に合わせた発音構造を理解する必要がある[17]。

②書く場合（伝えたい内容を（適切に）表現する力＝英語の基本的構造に関する正確な知識）

1) 冠詞の使い方、単数・複数の使い分け（日本語にはない）

日本人は、英語の冠詞の操作が苦手であると言われ、その理由が a と the の使い分けの難しさであるように説明されるが[18]、冠詞に関して重要なことは、単数形の単語に冠詞が付く場合と付かない場合があるということである[19]。英語では現実に存在しているものについては単数・複数を意識し、単数の場合に

17　このような英語の強勢構造を視覚的に理解させることの効果について、笠原園子・大倉直子「日本語母語学習者に対する視覚的英語リズム指導法の効果：母音挿入・添加の排除と弱母音の習得（Effects of Instruction of English Rhythm with Visual Helps to Japanese Learners of English : Preventing Vowel Insertion and Addition and Learning Weak Vowels）」文教大学文学部紀要 31 巻 1 号 107-122（2017）参照。

18　西村喜久『これが a と the の謎の正体だ』（1997、明日香出版社）、藤田英時『冠詞まるわかり 100％ブック－もう迷わない a と the の使い方』（2004、ノヴァ）、津守光太『a と the の底力』（2008 年、プレイス）、テルキ デイブ『a と the のココロ：英語のものの表し方がわかる』（2013、学研教育出版）のように、書籍タイトルにも a と the の対比が使用される例が多い。

19　大友・前掲注 14、86-87 頁参照。

は冠詞を付すが、人間が考え出した概念は常に単数として扱い、しかも、現実に数えることができないため、冠詞を付けないで使用する。このようなことを理解しなければ、英語における名詞の役割を理解することができず、正確な文章を書くこともできない。

2) 日本語と英語の違いの理解

i) 日本語は主題優勢言語であり英語は主語優勢言語である

英語は、主語（名詞）とその状態や動作を表す動詞（自己単独の動作を示す場合には自動詞、他との関係を示す場合には他動詞を使用する）で文章が構成される。これに対して、日本語の場合、助詞「は」はその前の名詞（句・節含む）を主題として、その後に主題の説明を行うという構造をとっており、英語の主語と動詞の組み合わせに近いのは、日本語の場合、「が」による主語と述語の接続である。

このように、日本語が主題優勢言語であるということを理解するためには、日本語の「は」と「が」の違いを正確に理解する必要があるが、日本ではそのような教育がなされておらず[20]、このような日本語教育の問題も日本人の英語修得に影響を与えている。

ii) 日本語は high context 言語であり、英語は low context 言語である。

日本語と英語の違いとして、日本語は高文脈文化（high context）言語であり英語は低文脈文化（low context）言語であるという点も指摘される。このことはアメリカの文化人類学者が世界中の言語を分類したことに始まる[21]。高文脈文化では、言語以外の状況や前後の文脈などで情報が理解されることにより言語で情報が表現されないことが多くなる。これに対して、低文脈文化では、情報はすべて言語によって伝達されることになる。

20　同上、87 頁注 1 参照。

21　Edward T. Hall, Beyond Culture (1976, Anchor Books, Doubleday).

このように、日本語と英語とでは、情報伝達における言語使用の比重が異なるため、とりわけ日本語の内容を英語に訳す際には（あるいは日本語を母語とする者が英語を話す際には）、ふだんいちいち気にしない主語の省略に気をつけて主語を必ず使用するとか、指示代名詞を明確にするというような意識が必要になる。

iii) その他

その他にも、日本語は語順を変えても文章の意味が大きく変化しないが、英語は語順で意味が変わることや、日本語では伝統的には物を主語にすることができない言語であったため[22]、物と人の関わりを受け身で表現することを好むのに対して、英語はそのような制約がないので受け身ではなく、物を主語にする能動態の表現が多いという点等にも注意が必要である。

（未完）

22　日本語では、どうしても物を主語にしたい場合には、擬人法という方法により物を人に見立てることで主語にすることを可能にしてきた。